

「眞実の宗教」 (十四)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

〈資料〉

中国の古い辞書『説文解字』セツモンカイジ（許慎著）には、恩は恵（めぐみ）であると解説され、また『心地観経』ジカンギョウには四恩（父母・衆生・国王・三宝）が説かれています。

三宝（仏・法・僧）の恩は父母・衆生・国王のとは異質であり、仏法に遇った（帰依した）人でないと分からない恩です。真宗ではこの仏・法・僧の三つは南無阿弥陀仏の一つにおさまると教えられています。

また仏恩とは、本願念仏の恩と本願念仏の意義を教えてくださいいただいた教主釈尊及び諸高僧（諸仏）の教えの恩であります。これらの恵みは念仏者だけが主体的に感ずる恵みです。

宗祖親鸞聖人は、

無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること 如来二種の回向の 恩徳まことに謝しがたし

（『正像末和讃』『聖典』五〇四頁―C 48）

と和讃（和語讃嘆）しておられます。

生物がこの地上にあらわれた時から、他の生物を餌としてとり、子を産み育てて、老いて死んでいく。このサイクルを何億回も繰り返して、多くの生命が今日まで存続してきました。これを衆生多少不可思議（『聖典』三二五頁―L 14）といいます。

人間だけが言葉を使い、文化を歴史的に形成してきました。しかし協力・互恵といいつつ戦争のような残虐行為を放棄できず、日常の軽微な愚行は申すに及ばず、お互い侵しあい苦しめ合いながら、方向の不明確な欲望的共同生活を繰り返してきました。仏教ではこれを五濁悪世（『阿彌陀經』、『聖典』一三三頁—L11）といいます。

この不純粋な人間の生きざまのなかで、まことの道理が南無阿彌陀仏という言葉（名号）となり、その意義が本願として展開し、私たちを倦^{ウツ}むことなく目覚まし続けて下さっています。

しかし、私たちは余りにも煩惱が根深く、欲望生活をしぶとく拡大させようとして、心の目が眩んで生きています。ティッシュから飛行機まで何でも金さえあれば買える状況をつくりだして、あくせく働き、金と名誉と快樂をむさぼっては苦しみ、先になつたら何かいいことがあるに違いないとみはてぬ夢をいだきながら、自己自身を問うことをなおざりにしています。昔からこのような迷いを繰り返し、思うようにならぬと苦しんできたから「無始流轉の苦」といわれるのでしょうか。宗祖親鸞聖人が「無始流轉の苦をすて」（『正像末和讃』『聖典』五〇四頁—C48）るとか「娑婆永劫の苦をすて」（『高僧和讃』『聖典』四九七頁—A26）るとか教えられるのはどういうことでしょうか。

親鸞聖人は、浄土という光明の精神界（真仏土）を明らかに示して下さいました。南無阿彌陀仏の用（はたら）きで私たちの内面にいま開けてくる陰（かげ）のない透徹した明朗な精神界で

す。ひとたびその精神界に生まれると煩惱で造った過去の罪や障りによって再び暗くなるということが全くありません。本願を深く信ずる他力の信心によって「無始流転の苦」がすたるのです。この浄土往生という精神生活ができるのは、全く本願の大慈悲のおかげであり、釈尊・親鸞聖人を始めとする諸高僧・諸先輩が身を砕いて教えて下さったおかげです。

自分がその比較を絶した大きなお恵みを忘れて、いつも自分の都合で「善し悪し」といつて自分の都合で相対の世界にとどまろうとしていることを深く恥じて（『歎異抄』後序の唯円大徳の述懐。『聖典』六四〇頁―L11）、いよいよ教えを深く聴聞し、念仏往生の真義を徹底して知らしめていただくことが報恩の生活です。この遇法の歎びを私有化することなく、有縁の多くの人々に伝え、他力不思議の信心をよろこびあうところに尊い共同生活（僧伽）の形成が実現します。宗祖親鸞聖人は『大経』を真実教として浄土真宗を立教開宗された。その恩徳は筆舌に尽くしがたいためです。

『大経』『仏説無量寿経』 解説

この経は『大無量寿経』と呼ばれ『大経』とも略称される。阿弥陀仏の本願を説く浄土真宗の正依の経典である。

経典は普通、序分・正宗分・流通分と三つに分けられるが、この『経』の序分には、王舎城の

耆闍崛山で、すぐれた比丘や菩薩たちに対して、釈尊が五つの瑞相を（めでたいすがた）現わして説かれ、釈迦如来が人間世界に出現されるのは、苦悩の衆生をもれなく救い真実の利益を与えるためであると説かれている。

正宗分にはいつて、第一に法蔵菩薩が発願し修行して阿弥陀仏となられた仏願の始終が説かれる。まず「讚仏偈」には、師の世自在王仏を讚嘆しつつ、みずからの願を述べ、ついで諸仏の浄土における選択と、それによってたてられた四十八願が説かれている。その中心は、すべての衆生に名号を与えて救おうという誓いである。次に四十八願の要点を重ねて誓う「重誓偈」が、さらに兆載永劫（終ることのない長い時間）にわたる修行の詳細が説かれ、この願と行の果としての阿弥陀仏の徳とその浄土の詳細が説かれている。

下巻では本願が成就し、我々衆生が阿弥陀仏の名号を聞信する一念（信の一念）に往生が決定し、浄土に往生した者の徳が広く説かれる。

次に釈尊は弥勒菩薩に対して、衆生の三毒・五悪と仏智疑惑とを誡め、仏智不思議を深く信じて真実報土（真実の信心の人が生れる迷いの全くない精神界）の往生を願うべきことが説かれている。

最後に流通分では、この経だけはいつまでも留めおいて衆生を救いつづけると説いて結ばれている。

教行信証（「教巻」、『聖典』一五二頁―L3）

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相ゲンソウなり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり、ここをもって、如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり。

『歎異抄』（『聖典』六四〇頁―L3）

おおよそ聖教には、真実権ゴンケ仮ともにあいまじわりそうろうなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてそうらえ。かまえてかまえて聖教をみみだらせたまうまじくそうろう。大切の証文ども、少々ぬきいでまいらせそうろうて、目やすにして、この書にそえまいらせてそうろうなり。

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がた

めなりけり。されば、そくばくの業ゴウをもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫コウゴウよりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離シュツリの縁あることなき身としれ」(※『散善義』)という金言キンゴンに、すこしもたがわせおわしまさず。(※善導の『観経』の註釈書)

〈法 話〉

昨年の報恩講の法話を本にしていたいただきましてありがとうございました。

皆様方のお手元に届いていると思いますが、その中で校正のときの見落としがありました、六頁の四行目の下のほうから「和讃」というのは仮名交じりの文章の・・・」

の「仮名交じりの文章の」を消していただいて、「七五語調」の「語」の字を消していただいて読んでみますと「和讃」というのは七五調で今様の形をとって教えを表してくださいました讃歌です。」こうしたらすっきりなると思います。

今日お話申し上げたいことは昨年の続きなのですが、昨年のお話をみましたら蓮如上人の『御俗姓』の中で一番大事なことを現代語の四ヶ条にして私の粗末な領解を述べています。二十一頁

（『真実の宗教』（十三）の四行目から読んでみますと、

この報恩講七日間に、

仏法の信心とはどういう信心なのか、

他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、

本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、

自分はたして信心がえられているのか

これが『御俗姓』の中一番大事なところだと思っております。原文で申し上げますと、『聖典』の八五二頁の一行目からです。

「しかのごときのもがらは、この砌ミキリにおいて仏法の信・不信をあいたずね、これを聴聞して、まことの信心を決定すべくんば、真実真実、聖人報謝の懇志カナに相叶カナうべき者なり。」

ここが一番大事なところだと私は思っています。平たく申しますと、報恩講は単に親鸞聖人のご命日に期してお勤めをする年中行事ではありません。また、もつと平たく言えば親鸞聖人のお

祭りではありません。親鸞聖人のご恩報謝の御仏事であります。ご恩報謝とはどういうことかといえど親鸞聖人が教えられた他力の信心をわれわれ一人一人がはっきりと会得させていただくということが親鸞聖人のご恩を報謝することになるということです。それを抜きにして報謝ということはいいけません。そのことを蓮如上人がおっしゃられたことを私が現代語でどういうふうに言ったらいいかと思ひまして先ほどもうしました『真実の宗教』（十三）の二十一頁の

仏法の信心とはどういう信心なのか、

他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、

本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、

自分はたして信心がえられているのか

こういうことを自分のこととして聴聞して信心をはっきりさせていただくのが報恩講の大目標であります。そういう意味におきまして、昨年の報恩講ではもう少し詳しく申し上げるべきであったと私は思いましたので、今年私は皆様方に見ていただく資料を作りました。

それを読ませていただきます。

中国の古い辞書「説文解字」（西暦一〇〇〇年頃成立、許慎著）には、恩は恵（めぐみ）であると解説され、また『心地観経』（唐の般若訳）には四恩（父母・衆生・国王・三宝）が説かれて

います。両親の恩、たくさんの人々のめぐみ、国王の恩とは現代人の感覚では考えにくいのですが、昔の仏法をもとにして国を統治される慈悲深い王様。国民一人一人のことを忘れずに国を統治しておられる王様ということで国王と云ってあるのです。先ずこの三つあげてあります。次に「三宝の恩」、これは聴聞したものでないと分からないのです。父母・衆生・国王の恩は大体普通の考えでわかるのですが。三宝、それは仏・法・僧です。仏は覚者、もう少し詳しく申し上げれば、自覚覚他、自ら目覚め人を目ざめさし、覚行窮満カクキヨウクウマンということがありますが、一挙手一投足が覚りの現れないことは一つもないという。この仏とは「自覚覚他 覚行窮満」の人であると善導大師はおっしゃっております。法とはダルマ、ダンマ、道理。仏法の信心が他の信仰と違うのは「法」、法の絶対性を信ずるということです。他の宗教では絶対者を立てるわけです。絶対者を信ずることによつて、また絶対者をよりどころにすることによつて、自分の願いが叶うとか、願いが叶えてもらうように祈祷するそういう信仰が大体一般の信仰といわれているものです。仏法は法によつて目覚める、法を別の言葉で申し上げれば真如と申します。今の言葉に直して真理といつてもいいのですが、そうしますとちよつと間違いがおきます。真理というと科学的真理とか哲学的真理というそういうことを真理といいますが、真如とは全てのすべてのもののおく深くに内在している真実の道理。人間だけでなく全てのものが本体として内在している「真如」、我々は煩惱に眼が塞がれているのでそれが見えない。外面は見えるが内面は見えないという状態で

我々は生きています。ところが覺りを開かれた仏は外面ではなく内面にある真実の道理に目覺めた人です。内面が見えるとももの見方が違ってきて生き方が違ってくる。その生き方が違ってくるということは昨年の法話の中で申し上げますと二十一頁の「本願念仏のはたらきでどのような自己自身が変革されるのか」に通ずることです。仏法を聴聞しないあいだは、常識的な變動する幸福だけにとらわれていた。ところが自分にいろいろと思うようにしたいが思うようにならないことが一杯出てくる。それがご縁で聴聞させていただきますと、自分が今まで見てきたことは執着心で煩惱がはたらいて自分の都合だけでものを見てきたのだということがだんだんわかってきて、法によって目覺めることが不可欠だということに気がついてくる。そういうことでございます。

釈尊は三十五歳のときに覺りを開かれてしばらくは自分の覺りを楽しんでおられた。自受用法楽という難しい言葉がありますが、平たく申しますと自分の覺りの心境を楽しんでおられた。今まで楽しい心は開けなかったのが、今開けた。これはきわめて究極的なことだと思っただけで自分自身でその世界を楽しんでおられたのだが、梵天というインドの神様が釈尊に対し「貴方は自分の得られた覺りを一人で楽しんでいただけではいけません。全ての人にその覺りの境地を得させてくださるようにはたらいてくださるなくてはなりません。」と一所懸命に申し上げた。始め釈尊はそれは出来ない。私が開いた心境は簡単に人にわかるようなものでないから、そんなこととして

も疲れるだけだといって梵天の願いを聞き入れようとなさらなかった。ところが何回も何回も梵天が一所懸命お願いをしてやっと釈尊が覚りの世界を人々に説くことが大事だとお気づきになってそこに「説法」ということが始まりました。「説法」は法を説くということです。「説法」ということが今日我われのところまで続いている仏教という教えの元になっています。法が釈尊の言葉によつて教えになった。今は「仏教」という言葉が一般になっておりますが、これは明治以後のことで、キリスト教など他の宗教に対して「仏教」といったのであります。それ以前は仏法といていた。仏法が言葉になつて教えられ、弟子によつて記録された。それがお経として今日我々のところまで伝わつてきているのです。それを浄土真宗流に申しますと仏法とは阿弥陀如来の本願にきわまるということです。他にもいろいろ教えがあるけれど我々普通の人間（凡愚）にはとてもそれは実践が出来ない。親鸞聖人が教えてくださった浄土真宗はどんな者にも実践ができて、法によつて目覚めることができる。それは阿弥陀如来の本願に意義を深く聞いて成程と納得することだと親鸞聖人が一生をかけて教えられたわけです。それは聖人が法然上人という唯だ一人の真の師匠に会われたからです。法然上人は非常に素晴らしい自覚的才能の持ち主でありまして、日本で始めて浄土宗を独立させられた。ところが聖道門仏教の各宗の人が法然上人を憎んで、浄土の教えは単独にはないものだ。聖道門の教えの中にちよつと庇を借りている教えで独立するよきな教えではないと言つて攻め立てたわけです。それが政治問題化して法然上人は七十五歳のと

き流罪になるわけです。親鸞聖人と法然上人は四十歳、歳が違います。二十九歳のとき法然上人に会われた。その時法然上人は六十九歳であられた。そういうような関係で親鸞聖人は法然上人のお歳を召してから弟子であります。法然上人の教えを深く聞かれて浄土の真宗、浄土の真宗とは今の宗派の名前ではありません。浄土宗の真の宗、宗とは中心ムネということです。法然上人には浄土真宗という言葉はありません。浄土宗といえばそれでいいのだと考えておられた。『選択本願念仏集』という著作の公開によって、浄土宗を独立させられた。その結果流罪になろうがそんなことは問題でないのだ。自分はすべきことをしたという大満足の世界におられた。法然上人は八十歳で亡くなるわけです。法然上人の教えを深く聞かれて、その真の中心課題はどこにあるかを明らかにされたのが親鸞聖人です。浄土宗と対立して浄土真宗があるわけではないのです。これは現在の宗門の宗派的対立関係で考えると間違っています。

京都東山に知恩院というお寺があります。一般の人にどう云ったらわかりやすいでしょうか。眠り猫が彫刻されているお寺とか鶯張り（本堂の縁を歩くと鶯が鳴くような音がする）で一般に知られています、一三四年法然上人の弟子源智が法然上人の廟所を大谷寺としたが、後に知恩院と称し、この寺を総本山として弟子の聖光房弁阿（弁長）を第二祖として今日の浄土宗鎮西派が出来上がっています。それと今日の本願寺を中心にした浄土真宗とは宗派の上では別々になっています。そういう感覚で浄土宗と浄土真宗を考えると本来の意味が間違っています。決して法

然上人の教えにいけないところがあつて親鸞聖人がそれを正すために浄土真宗を立教開宗されたわけではありません。私の師匠は法然上人ただ一人であります。浄土真宗は法然上人が開かれたのであります。その法然上人が開かれた教えを私は口伝させていただいております。と親鸞聖人は云つておられます。ところがそこに法然上人が『選択本願念仏集』をもつて教えられた教えと親鸞聖人の教えというものに厳密な意味でやはり違いがあります。法然上人に反対して違いが出来たわけではないのです。法然上人が云おうとして云われなかったことを親鸞聖人が明らかに示された。それは何かといったら、『教行信証』です。法然上人は阿弥陀如来の本願を中心として浄土宗を開かれた。法蔵菩薩の本願を中心として選びとられた仏教、その中心は南無阿弥陀仏という言葉であり、それは本願のなかでは第十八願で明らかに示されているというのが法然上人の教えであります。ところが親鸞聖人はそれを否定されたわけではありません。その法然上人のおしえを深く詳しくうけとめられ『教行信証』という道理を明らかにされた。親鸞聖人による法の顕現といえますか、法をあきらかにする。平たく言えば我々普通の人間もちゃんと南無阿弥陀仏によつて往生成仏ができるという道理を教・行・信・証という四つの法を建てて教えてくださつたのであります。その中心は南無阿弥陀仏であります。

資料に、

三宝の恩は父母・衆生・国王の恩とは異質の恩であり、仏法に遇つた人、帰依した人でないと

わからない恩であります。真宗ではこの仏・法・僧の三つは南無阿弥陀仏一つにおさまると教えられております。また、仏恩とは、本願念仏の恩と本願念仏の意義を教えていただいた教主世尊及び諸高僧の教えの恩であります。

これはもっと具体的に申しますと皆様がいつもお勤めしておられます『正信偈』、詳しくは『正信念仏偈』と申します。あれは親鸞聖人がおつくりになったということは申すまでもないことです。あれは『大無量寿経』の讃歌でありまして『大無量寿経』の内容を一二〇句八四〇字の漢文の詩にして表されて法蔵菩薩の恩、釈尊の教えの恩、それを受けついで自分のところまで伝えてくださった七高僧の教えの恩を八四〇字で顕わされた。これが『正信偈』、正しくは『正信念仏偈』、一般には『正信偈』と云われております。聖人は、どういうおこころで『正信偈』をお作りになったかを『教行信証』の中で仰っております。それは『聖典』の「行巻」二〇三頁十五行目、

しかれば大聖の真言に歸し、大祖の解釈に関して、仏恩の深遠なるを信知して、『正信念仏偈』を作りて曰わく、

大聖の真言とは真言宗の真言ではありません。『大無量寿経』のことです。法然上人は『浄土

『三部經』と天親菩薩の『浄土論』とを所依の経論としてこれによって浄土宗を開かれました。そのなかに真実の教えと方便の教えとに分けるといふことはなかったのです。ところが親鸞聖人は『大無量寿經』こそ真実の教え、『觀經』、『阿弥陀經』は方便の教えであるとはつきりと分けられて、真実の教えである『大無量寿經』の内容を『正信偈』として表されました。それは大変なことと私は思います。これだけの一二〇句八四〇字で『大無量寿經』と七高僧の教えをまとめられたわけです。我々はその内容がはつきりわからなくて、ただ節をつけてお勤めするのが普通になっていますが『正信偈』というのは大変な教えです。これは余談になるかもしれませんが本願寺では安居というのがあります。安居とは僧侶の一番大事な一年に一度の中央研修会、その研修会で本講の講師が『正信偈』を取り上げるのは最後の最後のことで、先生のうちで一番素晴らしい先生が亡くなる前に『正信偈』を講義される。このような慣わしがあります。それほど『正信偈』は大事なもののなのです。私たちは『正信偈』は簡単なもののように思っていますが決してそんなものではないのです。

大聖の真言に歸し、大祖の解釈に關して仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく、
我々も實際はそう云われているのですから、大聖の真言に歸し、大祖の解釈に關して私の信心

を頂いた事は尊いことであります。ありがたいことでもあります。これは何物にも比較しがたいご恩でありますと受け止めてお勤めしなくてはなりません。本当はそうですが、なかなかそうなっていない。どこが節を間違えたのではないかとかそんなことしか考えていません。そういうものではありません。平たく申し上げれば親鸞聖人の教えはこの『正信偈』におさまるといつても差し支えないと私は思います。その『正信偈』というのが『正信念仏偈』正しく念仏を信じる。正しくとは間違った考えで念仏申すのではない。如来の本願を私一人がためなりといただいて念仏申す。決して念仏申すということは何か人間がどうにもならなくなった時に最後のこととしてあきらめの言葉として念仏申すということでもないし、また、死者を送る言葉でもありません。南無阿弥陀仏という言葉の用きハタマを受けて私の思いが全て転じていく、私の妄念妄想がすべてひるがえって私の生き方が変わる。それを『御俗姓』の中で云っておられるのです。それを現代語にしたのが「本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか」、という問題。そのことをはっきりさせてもらうのが報恩講だと私は了解しております。

昨年の報恩講から今年の報恩講まで約一年間ですね。時代がどんどん変わっていきます。仏教の言葉で言えば有為転変という言葉になります。戦後六十一年ですか。早く時間がたちました。この六十一年の間にこんなに時代が変わって、ことに最近では北朝鮮が核実験をやったということ。世界中が騒動しておる。日本の大臣の中にも日本が核を持たなくてはならぬ時が来るのではない

いかということに匂わせている人もある。平和憲法と云いながらそういう矛盾したことを大臣が云っていることは大問題である。それで私は浄土に対して穢土、穢土に対して浄土ということに最近深く思います。と云いますのは二十世紀の一〇〇年の間に戦争で亡くなった人、戦死者だけではありませんが、戦争によって直接間接に命を落とした人は世界中で約一億人です。ですから二十一世紀になったら絶対に戦争をしてはならないという自覚が出来なくてはならないはずだ、また、そうありたいと私は思っていた。ところが、アメリカの同時多発テロ以降、アフガン、イラクに兵を進め、イラクに兵を進め、又、北朝鮮ともなにか危ない関係ができてきている。こういうところが平和といいながら平和ではないですね。我々は理想として平和を掲げているが現実にはまったく反対のことをやっている。そういう中で私たち一人一人の精神の中に絶対平和の世界を発見させてもらうということは大事なことです。私は絶対平和の世界を目覚めて生かしていただいていますという、一つの大事な心の落ち着き所、仏教の言葉で言えば安心アンジンが根本です。安心は普通の読み方をしたら「あんしん」です。仏教では「あんじん」です。安心は起行キギョウに対して安心です。これは善導大師の云われたことです。私たちが目覚めの生き方をしたいという心をもって教えを聞いて、念仏するという世界にまで到達するには、心がどこかで今まで考えていたことと違った落ち着きどころを見出さなければそういう事が出来るはずはない。その安心が大事だ。これは真宗だけではありません。どの宗派でも安心ということに大事にするわけです。この

頃の日本は物質的的人生観しか持っていない人が多くなっています。ですから安心ということを考えない。とにかく先になつたら何か良いことがあるに違いない。一所懸命努力して勝ち抜いていくことが大事だというように人生を軽薄に考えて、深く考えない。内面ということに心を向けない。そういう生活がだんだん浸透してきています。人の心までお金で買えるといった人がいます。そういう時代になりました。そういう時代になればなるほど安心が大事なことになります。私はそういただいています。

本書の資料にもどります。

宗祖親鸞聖人は、

無始流転の苦をすてて、無上涅槃を期すること

如来二種の回向の 恩徳まことに謝しがたし

と和讃しておられます。

無始とは我々が知らないずっと昔からということですが。我々が考え及ばない過去から人間は苦しんできている。思うようにしたいが思うようにならないという苦をもって、それをごまかして暮らしている。そういう私たちが教えを聞いて、人生の大目標は人間の最高の自覚者であり、他

に自覚をすすめる仏になるということ、これが人生の大目標だということを深く知らしていたいて、そのことを期待して仏になる道を開いて生きる。それは阿弥陀如来の往相・還相回向の二つの用ハタラきがあるからそういう世界を我々が知らしていたくことが出来るのであって、常識ではそういう世界は得られない。そのご恩は何よりも深く且つ高いのだということです。「恩徳まことに謝しがたし」。我々が報謝しようとしても謝しがたい深いお恵みを受けているのですが、我々は煩惱に眼がくらんでいてそのことがわからないままに暮らしているのです。生滅を離れるとか、流転を超えると云いますか、どういったらいいでしょうか。生まれたものは必ず死ななければなりません。思うようになったこともあれば、思うようにならないこともあります。若い者はいずれ年寄りになる。そういうような世界を越えることが大事なのです。現実はそうであってもそれに引っかけたて暮らしては何処にも救いはないのです。

『歎異抄』の第一章に「弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし」とあります。私はこの「老少」に昔、引っかけました。人間は長く生きれば必ず歳をとる、どうして『歎異抄』に「老少善悪のひとをえらばれず。」と書いてあるのか。私は若いときそれに引っかけたのです。しかしだんだん歳をいってきますと、なるほどなあと思えます。若いときには感じなかった迷いとか悩みとかが歳をとってから出てきます。それはもう死を目前にしているということです。私はこの歳まで生かしていただきました。親鸞聖人の

七〇〇回の御遠忌が昭和三十六年だった。ところがやがて六年すると七百五十回忌です。その時八十九歳になる予定です。それまで命あるかないかはわかりませんが。八十九歳まで生きて親鸞聖人の七百五十回忌に遇いたいという願望があるけれども、「いずるいきいるいきをまたず」と『歎異抄』第十六条（『聖典』六三七頁）にあります。これは呼吸ということです。吐いた息が入らなければ命終わりということ。出る息を待たずということ。我々は明日もある、明後日もある、明々後日もあると思っっているけれども、又、何年も先の未来の予定をたてているけれども「いずるいきいるいきをまたず」。だんだん歳をとってくるとそんなこと云ってくれるな。元気でずっと長生きしたいのだから、そんなこと触れたくないという煩惱が起きてくる。若いときの煩惱と違うわけです。そこで始めて「無始流転の苦をすてて、無上涅槃を期すること」という言葉にふれて来る。期するとは期待することです。私はいつ命が終わっても私は間違はなく成仏できるという世界を会得させていただくということが大事です。それは如来の回向によると、親鸞聖人は仰るのです。法然上人の『選択本願念仏集』にはこれだけはつきり書いてあるところはないと思います。法然上人は四国に流される時に警護の武士が注意したといっています。貴方は念仏停止の法に反して流刑を受けたのだから、流されて行く途中で念仏を称えることはなっていないと注意した。ところが法然上人は「私は殺されても結構です。念仏をやめるわけにはいきませぬ。」と云われた。そういう方がおられたから、今日念仏が私のところまで伝わっているのです。

それが二種の回向の具体的なすがただとはつきりいただいた方が親鸞聖人だと思えます。往相回向・還相回向の二つの用ハタラきがあるから念仏生活が出来るようになった。念仏を称ハタラえているのは、それは念仏を称えねばいけないようにしていただいているのだ。他力回向とは如来のお力で私は念仏申さざるをえないようにしていただいております。そういうことがだんだんと歳とともにうなづけてきます。つまり、自分の限界を知らせていただく。頭で知るのではなく身体で感じる。これはこの世に人間として生まれたということは容易ならぬことだ。それを深く、深く考えて今日まで生きてきた。あと残りは少なくなってきた。今年ももう十一月、十二月。早いものです。残り少ないということです。その時に「貴方は安んじて命終われますか」という問いがいつも出てくるわけです。大丈夫です。どういう死に方をしようがそんなことは問題ではありません。現在、信の一念ということが大事なのです。「我は実に此の念によりて、現に救済されつつあるを感ず」(『他力の救済』)と清沢先生は云われたが、「現に救済されつつあるを感ず」とは信の一念が確立するということです。今、如来を信ずるひと思いが大事なのです。その背景に二種の回向がある。往相回向・還相回向全ての人を浄土に迎えとらねば私は仏に成らないという誓ハタラいがこの二つの用ハタラきになって現れている。それで私は願生者とならせていただく。願生者とは浄土を願う人間です。一般の信仰とはここが違うわけです。一般の信仰はこの世で何とか神様の力を借りて自分の思うようにさせていたいただきたい。そういうところでは、そういう一般の信仰が聖道門の中に入りこん

できまして、聖道門が外道に落ち込んでいった。教義は立派でも現実には現世祈禱である。

皆さんは東京が近いから大田区の本門寺にいかれた方がありませんでしようが、本門寺では勢いのよいことをやっています。我々真宗では考えられないことです。お坊さんが真宗で云ったら内陣の御本尊の安置してあるところが上がって大太鼓を打って「南無妙法蓮華經」と唱える、下に参詣している一般の信者が団扇太鼓を叩く。それは元気なこと、大変な仏法だと私は本門寺に行っていると思いました。真宗では太鼓叩いて念仏することはありませんから。我々一人一人が如来のおもよおしによってどんなどころでも、他人に聞こえようが聞こえまいが南無阿弥陀仏と称えさせていただく。南無阿弥陀仏という言葉になった大きな用ハタラきが私を変えてくださる。私は元気をだして念仏を称えなくてはならないのだということではないのです。元気のある人は元気をだしたらいいのです。元気がないものは小さな声でもいいのです。声に出さなくてもいいのです。とにかく息がある間は念仏できますから。息が止まれば念仏できません。息がある間は念仏できますから、小さかろうが大きかろうがどんな称えかたであろうが南無阿弥陀仏は如来の回向である。私の力で称えているのではない。そういうことに領けた人はものが云えなくなっても、うん、うんと云っていても自分の内心に念仏称えていることがわかればそれでいいのです。

他宗のことをとやかく云うのは悪いが、日蓮上人が「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」という「四箇格言」を発表されたと聞いております。昔から、浄土教団は日蓮上人の仮想敵国に

なっているのです。念仏を称えると、無間地獄に落ちると云う。ですから今創価学会がそれをもって真宗や浄土宗を責めてきますが、その始まりは日蓮上人にあります。日蓮宗は大変威勢がいい。真宗は何しているのか、一向に元気がないじゃないかと云われるが、そういう元気は通俗的元気です。我々の元気は一人一人が内心の中に人生の本来の深い意義をわからせていただいて、いつもこれからだという心持で生きられるのが元気です。そういう元気をわからせていただくのが大事だということを私は歳とともに感じておるようなわけであります。

それと今、介護ということがあります。介護とは年寄りが若い人のお世話を頂かないと生きていけない。ところが介護職員になり手が少なくなった。介護職員は給料が少なく仕事が過重だから、辞めていく人がどんどん増えていることが問題になっている。保険制度ができて、介護職員が辞めて行くので介護施設に入っても介護してもらえなくなる。保険料だけは上がると。こういう状態になっている。それで私は思います。身体の介護はしてもらえなくなっても、自分の精神が仏様の本願によって介護していただければ、その人は生きられるのです。認知症ということもあります。認知症という言葉は誰が作ったか知りませんが、有吉佐和子、の云う恍惚の人です。今日の医学用語で認知症という。私も水道の栓を止め忘れていたりすると、この頃認知症のはしりではないかと思われたことがあります。そういわれても自分は仏法によってちゃんとここに生かしていただいております。無上涅槃を期待して生かしていただいておりますと分かって生

きられる、これが本当の元気だと私は思っております。無理に日蓮宗の太鼓のように元気を出すのではなく、本当に本来の元気を取り戻して生きる生き方がある。それが如来回向ということです。

生物がこの地上にあらわれた時から、他の生物を餌としてとり、子を産み育てて、老いて死んでいく。このサークルを何億回も繰り返して、多くの生命が今日まで存続してきました。これを衆生多少不思議といいます。

これは五つの不思議ということがありまして、曇鸞大師の『和讃』の中に、

いつつの不思議をとくなかに

仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということは

弥陀の弘誓になづけたり

という『和讃』があります。これは非常に大事な和讃であると曾我量深先生から聞かせていただいております。『聖典』四九二頁中段（十三）です。

五つの不思議ということは簡単に申し上げますと、「衆生多少不思議」とは、生き物の命がずつ

と続いているということです。それから気象天候が人間の意志以上のところで動いているこれが「龍力不思議」。私は鹿児島にいますので台風情報には敏感です。だいたい鹿児島県は台風銀座と云われています。日本中に銀座はたくさんありますが、台風銀座といわれているのは鹿児島県だけです。しょっちゅう台風がきますから、南太平洋で台風ができたときどっちらに台風がくるかテレビを見て予想します。そして、きてくれないといいなあ、朝鮮半島の方に行ってもらいたいなあとという利己的な心を起こします。そういう気象の変化を「龍力不思議」といいます。人間の頭で考えたって本当のことはわからない。来た時は来た時で被害を受けていかなくはならないのだが、台風が接近して来るとそういう利己心をおこす。それから「業力不思議」は本能の力です。あらゆる生き物は本能で生きている。固体維持、種族維持の本能で生きている。私は最近植物を見ていて、植物は偉いものだと思います。枝を切ってもなんにも文句を云いません。そこからまた新しい芽が出て、花を咲かせる。人間はあんな調子で腕を切られたら怒るし、腕も生えてきません。人間の身体で生えてくるのは歯と爪だけです。歯も二度しか生えてきません。道綽禅師は七十過ぎてから歯が生えてきたと伝えられています。齢歯と云います。そんな人はめったにいません。そういうことです。植物を見ますと人間以上の能力を持っていることが分かります。文句を言わずに枝を伸ばして花を咲かせる。切ってもまた新しい枝を出して花を咲かせる。これは植物の本能です。そういうのを「業力不思議」といいます。「禅定力不思議」というのは紀元前

からインドのガンジス川流域でヨーガをやって精神統一ができた人がいました。その人には普通の人が見えないものが見えるようになる。聞こえないものが聞こえるということがあったようです。これを「禅定力不思議」という。「衆生多少不思議、龍力不思議、業力不思議、禅定力不思議」これで四つです。あとの一つは「仏法力不思議」、「仏法不思議」です。「仏法不思議」とはどういうことかと云いますと、平たく云えば、たすからないものがたすかるということです。絶対にたすかるはずのない罪悪深重な我々が如来の本願力によって目覚めて生き、尊い自分の生というものものの深い意味を知らしていただいて苦悩から完全に解放されていくというのが「仏法不思議」です。

仏法不思議ということとは

弥陀の弘誓になづけたり

本願力のお不思議ということことです。そういうことを親鸞聖人は教えてくださいました。元は曇鸞大師の『浄土論註』にあるけれども如来の本願力のお不思議を二種の回向として、往相回向・還相回向として、二つの用きハタラとして教えてくださいましたのが親鸞聖人です。そのおかげで私たちは浄土を願う生き方ができるようになります。身体はこの娑婆世界にいるが、精神は浄土を生きること

ができる。絶対自由の世界、絶対平等の世界、絶対平和の世界をいつもわれわれは念仏することによって精神の内面に受け取って生きていく。そういう世界です。老苦もそれで超えられる。死苦も超えられる。そういう世界を早く会得しなさいと、親鸞聖人は『教行信証』を書いてすめられたと私は思います。なかなかそこがわからないものですから、親鸞聖人のお恵みというのをあまり感じないで生きています。生きていくのではないのでしょうか。親鸞聖人のお恵みをあまり感じないで生きている私たちに少なくとも一年に一度は親鸞聖人にこういうお恵みを頂いているのだと確認させていただくのが報恩講だと私は思っています。他力の救済を忘れている。忘れている我々が確認させていただくことによって私自身が変わる。変革というと革新政党の政治的な発言のように聞こえるが、変わるということ、質的に転換ができるということ。外からみても大して変わらないのですが、内面が変わる。内面が変われば外から見た姿が少しは変わってくる。それは見る人が見ればわかるが、内面の変わらない人が見たって何のこともない。あの人は信心を得たというが、いつも愚痴をこぼしているし、心に皺がよっていると批判される場合もある。それは煩惱が動き出したときは愚痴も出るし心に皺もよるかもしれないが、南無阿弥陀仏という言葉によって自分の内面には絶対平和、絶対自由、絶対平等の世界に導きいれていただいているということがわかってくるとその人は本当に穏やかな暮らしをさせていただくことができるし、また他の人にそれをお勧めすることもできる。ということ。真宗教団が今日まで続いてきています。こ

れは本願寺を中心にして組織的に維持しているということとは違います。そういう一面もありませんが、教団組織によって教団が世俗的に維持されてきているようなことではない、たすかった人がこの教えで私はたすかりました。貴方もお聞きになってみたらいかがですかとお勧めをして聴聞のサークルが広がっていく。それが仏・法・僧の僧、僧伽サンガです。法によって目覚めた人の共同体が出来上がる。その僧伽サンガのおかげで今日私のところまで教えが伝わってきている。教えが伝わってきて、私がたすかっている。これは三宝の恩であると『心地観経』にのべられているが、親鸞聖人の教えによって考えれば、三宝の恩とは南無阿弥陀仏と一つにおさまる。我々が称える南無阿弥陀仏の中に三宝はいつも顕現している。姿はみえないけれどもちゃんとそのことが内側に感じられて生きていくことができる、そういうことだと思えます。

〈休憩〉

資料を見ていただきます。

「人間だけが言葉を使い、文化を歴史的に形成してきました。しかし協力・互恵といいつつ戦争のような残虐行為を放棄できず、日常の軽微な愚行は申すに及ばず、お互い侵しあい苦しめ合いながら、方向の不明確な欲望的共同生活を繰り返してきました。仏教ではこれを五濁悪世（『阿弥陀経』、『聖典』一三三頁―L11）といいます。

『阿弥陀経』の中に五濁ということが説かれています。五濁とは人間の世の中が不純粹だということをや五つに分けてあるわけです。劫濁コウジヨク、見濁ケンジヨク、煩惱濁、衆生濁、命濁メイジヨクの五つに分けてありますが、それは釈尊がそう云っておられますから、釈尊の時代から五濁があつたので、時代が下つたから五濁になつたというわけではありません。人間の社会はいつでも不純粹な世界でお互い侵しあい苦しめあいして生きています。協力・互恵と云いつつ、理想と現実が違ふ。濁っているというのは水が濁っているのとは違つて不純粹ということでは、清浄（純粹）に対して穢とか濁というのです。不純粹な人間生活の中に我々は浄土を内観して生きることが出来る。これを具体的に説いてあるのが『観無量寿経』です。

韋提希が自分の生んで育てた子供に殺されかけて牢獄の中に入れられる。その韋提希がどうすることもできなくなつて釈尊の教えを聞いて浄土を願うことができるようになった。これは『観無量寿経』の序分（発起序）にある。どういう因縁で『観無量寿経』という經典ができていたかということについては甚だ具体的に説かれている。このことを親鸞聖人は『教行信証』総序に、

浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。

（『聖典』一四九頁）

阿闍世が親を牢獄に入れたりすることは一般的に考えてみればこの上もない逆害であり、親不孝の極まりだが、仏法によって視点をかえて見たときに、浄土の縁が熟して逆害が行われた。こういう具合に親鸞聖人はみておられます。我々の常識を覆してしまった。我々は自分に都合の悪いことはつまらないことだと思えます。こういう具合に考えます。韋提希という人は大変苦勞した人だなあ。子供に背かれて難儀した人だが、息子の阿闍世は悪人だと思うけれど、親鸞聖人は「浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。」浄土の縁が熟して王舎城の悲劇が起こった。こういう受けとめかたをしておられるのです。これは『教行信証』の総序にあります。ここは普通の道徳的常識では読めないところです。

我々が忌み嫌っていることも、教えを聞いて目覚めた人にとって見れば、このことを通して浄土を願える人間に自分はさせていたただいたという喜びがでてくる。転悪成徳とはそういうことです。悪を転じて徳を成ずる（曾我量深先生の読み）と親鸞聖人は『教行信証』の総序の中で述べておられます。そういう世界がわかる人は本当に明るいわけです。阿闍世も最後はたすかっています。韋提希だけがたすかたものではありません。阿闍世は親を殺そうとし、牢獄に入れたりした業の報いで瘡^{カサ}ができてその臭いがひどくて、どういう治療をしても治らなかつた。インドの六師外道といわれている思想家がいろんなことをいって慰めたが治らない。最後に耆婆という大臣が

阿闍世を釈尊のところへ連れて行って、釈尊の教えで阿闍世は救われる。そういうことが『涅槃經』に出ています。それを親鸞聖人が「信卷」の中に長々と引用しています。(二五二頁以下)我々は善悪の常識で阿闍世ほどの悪人はいないと思う。また、阿闍世をそそのかした提婆ほどの悪人はいないと。常識的な善悪で人を批判してしまうが、釈尊はそういうことはなさない。親鸞聖人はそういう常識で『観經』を読んでいられない。『観經』には『大無量寿經』の本願の法に導き入れる方便として阿闍世のような悪人が救われる道が説いてある。これは『観經』の内奥にある問題です。つまり表を見れば阿闍世は大悪人になっているが、決してそうではないと親鸞聖人は『涅槃經』によってみておられます。これはどんな悪いことをしてもかまわないという、そんないい加減な話ではありません。人間は業によって悪をせざるを得ない、自分の意志以上のところで行動して、それが極めて悪だという場合がある。単に犯罪ということだけではありません。ところがその悪を深く自覚させていただいて本願によって目覚めを得たということが救いです。ここところが真宗の教えの深いところですよ。老少善悪の人を選ばれず。ただ信心を要とする。単に老少だけでなくそのあとに善悪がある。人間のたてた善悪の世界にさ迷っていたものが教えを聞くことによって善悪の世界から解放される。そこには愛するとか憎むとかいう普通の考えから越えられる道がある。それは絶対平和の世界ですよ。

この頃のニュースで申しますと、北朝鮮の金正日が米国は不倶戴天の敵だと云ったそうです。

不俱戴天とはともに天を頂かないということ、絶対に心が通じ合わない。敵であるということ、私はいろいろ考えて見ましたら、朝鮮戦争の時に北朝鮮の政権（金日成政権）は朝鮮を全部自分の国として支配したいと思っていたけれどそれができなかった。米国と韓国とが一緒になつて戦つて三八度線を引いてしまった。それで金正日は米国が憎い。不俱戴天の敵だといっている。こういうのが普通の世界です。イラクの戦争だつてそうです。必ずしもアメリカに味方しているイラク人ばかりではありません。フセインを支持している人もあります。いつまでたつてもイラクの戦争は終わらない。こういう状態が続いているのは真に悲しむべき五濁の世の中の現状です。個人的に申しましても愛憎で我々は生きています。自分にとって都合のいい人は愛する。都合の悪い人は憎む。そういう世界から一步も出られない。そういう世界で生活している我々に対して浄土真宗は愛憎を超える世界です。それが廣大無辺の世界です。これはなかなかわかりにくい。常識を超えた廣大無辺の世界を感じて、我々はたすかつていくのです。常識の世界でいくら平和、平和といつても理想は平和でも、本当に自分の内面が平和にならない。こういう問題です。平和とは弾丸の音がしないのだけでは平和ではないのです。私の内面が平和である。昨年も申し上げました中に曾我先生のお言葉があります。二十九頁の中ほどです。「真実の宗教」（十三）

「南無阿弥陀仏と一念疑いなく自力の計（はからい）をすてて、静かな心をもって、仏願わく

ばこの罪深き私をたすけましませと念ずるのであります。

これは誰でも、どこにいても、いつでも、悲しい場合でも、うれしい場合でも、たやすく仏を念ずることができるのである。

この念が現前する時、いかなる煩惱妄念がおそい来っても。内心の平和は絶対に破れません。これを真の救済と申します。」

これは米国のロスアンゼルスで昭和三十年（一九五五年）に曾我先生が当時の別院の輪番さんの奥さんに書いて与えられたものです。ここに「内心の平和は絶対に破られません」南無阿弥陀仏によつて内心の平和は持続されていく。ところが我々は南無阿弥陀仏を忘れると内心の平和は破れるのです。他力の救済を忘れると我々は自分の妄念に振り回されていつも人を憎むのです。都合の悪いことがあると人を憎むのです。敵対する。そういう世界から出られないのです。そういう我々を悲しんで如来の大慈悲があるのです。大慈悲の象徴が南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏という言葉をもって我々を絶対平和の世界にお導きいただくことを回向という。そういう世界がわかり、うなずけた人は平和である。ところがそこがわからないと我々の内心の平和が破れる。そういうことです。本書の資料にもどり、

この不純粋な人間の生きざまのなかで、まことの道理が南無阿弥陀仏という言葉（名号）となり、名号の意義が本願として展開し、私たちを倦むことなく目覚まし続けていてくださいます。

しかし、私たちは余りに煩惱が根深く、欲望生活をしぶとく拡大させようとして、目が眩んで生きています。ティッシュから飛行機まで何でも金さえあれば買える状況をつくりだして、あくせく働き、金と名誉と快楽をむさぼっては苦しみ、先になつたら何かいいことがあるに違いないとみはてぬ夢をいだきながら、自己自身を問うことをなおざりにしています。昔からこのような迷いを繰り返し、思うようにならぬと苦しんできたから「無始流転の苦」といわれるのでしょうか。宗祖親鸞聖人は「無始流転の苦をすて」とか「娑婆永劫の苦をすて」とかと教えられているがこれはどういうことでしょうか。

親鸞聖人は、浄土という光明の精神世界（真仏土）を明らかに示して下さいました。

真仏土とは言葉が難しいのですが、真の浄土という意味です。方便の浄土ではなくて真実の浄土。方便の浄土とは実体的な形のある世界がどこかにあつて、我々が死んでからそこに行くといふ説かれています。方便の浄土です。そういう浄土は教えの中で我々を真の浄土に導きいれるために説かれた方便の浄土であります。真の浄土とは南無阿弥陀仏という言葉の用きハタラでいつも自分に開けてくる光明の精神界が真実の浄土である。真実報土というは無量光明土である。我々の常識や

学問では、はかり知れない世界である。こういうより他にない。法然上人の教えの場合には過渡的な問題があります。浄土の教えを独立させてくださった大きな師匠ですが、平安時代の終わりに鎌倉時代の始めにかけての時代の移り変わる過渡期の世界で啓蒙的に浄土の教えを明らかにしてくださいましたから、そこに臨終来迎ということを完全に否定していらっしやらない。仏が念仏する人を必ずみそなわして我々を臨終に浄土に迎えとってくださいると仰っているが臨終来迎です。ところが親鸞聖人は「臨終まつことなし。来迎たのむことなし。」(『末燈鈔』六〇〇頁)とはつきり云っておられるわけです。死ぬ時の救いではありません。また、死ぬ時に仏様が迎えに来てくださるといふ幻想的な救いではありません。現に私たちが念仏申すときに私に光明の世界が開けてくる、これが私の救いです。この救いは私が命終わって変わられません。そういうこととはつきりここで申しておきます。「我は実に此の念によつて、現に救済されつつあるを感ず。」(『他力の救済』)と清沢先生が云われていることはそういうことです。死ぬときはどういふ姿で死ぬかわかりません。

『他力の救済』私はこの頃九州でおきた交通事故を考えてそういうことを思いました。酔っ払い運転の自動車は橋の上で前の自動車に追突して子供三人が一度に亡くなった事故がありました。誠に痛ましい事故です。カブトムシと一緒に捕ろうと子供等連れていった両親が酔っ払い運転の自動車に追突されて海に落ちてしまった。そこで大人だけがたすかって子供はたすからな

かった。それは福岡市の職員が起こした事故でした。あれから特に飲酒運転が非常に厳しく取り締られるようになりました。これは我々が考えて、どういうわけでそういうことが起こったのか。飲酒運転の車が追突したということまでは分かるけれど、どうしてその人の車が飲酒運転の車の前を走らなくてはならなかったのか。そういうことになれば我々の頭ではわからない。偶然論とか運命論とかになってしまふ。運が悪かった、偶然そういうことになったところにならぬか我々の頭はめぐらない。しかし、これは子供を一度に三人失った親はどういうふうを受け止めたら、たすかかっていくのかという大きな問題だと私は思います。これは酒を飲んで運転してはいけないということとは質の違う話です。いつどこでどういうアクシデント（不慮の事故）が起きるかもしれないという中を我々は生きている。アクシデントが起こって自分が受けたことをどう受け止めていくかという内面性の問題です。そういうことは教えを聞かないと分からないし、たすからないです。実に悲しいことです。憎んでも憎みきらないということです。犯人を死刑以上の刑にしても死んだ子供は帰ってきません。そういう問題が我々一人一人にあるわけです。我々はそういうめにあつていけないから他人事と思つていけるが、自分がそういうことに何時あうかもしれない。そういう私たちがどこで本当の救いを得ていけるのかという問題です。それは信心、安心の問題だと思つてます。私は今単車の運転をやめました。何も運転しません。歩くだけです。お酒を飲んで歩いてもとがめられはしませんが、自分でひっくり返れば自業自得です。もう一つの問題

は、酒でも飲まなければやりきれないということ。私は（役所）に勤めたことがないのでわからないが、一日中事務ばかりやって書類ばかり睨めっこして、住民サービスという美名のもとに朝八時から五時まで事務をやっていけば、酒でも飲まないとやりきれないということもあるんじゃないですか。私は飲酒運転がいいとは云っているではありません。酒を飲まなければやりきれない心が仏法によつて平静に戻る世界があるということ。そういうやりきれぬ心をもっている我々であるが、それが平静に戻る世界がある。そういうことをあの事件で深く思いました。娑婆暮らしは大変です。やりきれないことばかりです。金儲けのことで一所懸命になるわけですから、世の中のことは、『般若心経』の「色即是空 空即是色」が一般には通用しないわけ。ともかく利益が上がらないとだめなのです。『般若心経』でいくら「色即是空 空即是色」、儲けろが儲けからまいがそんなことは大した問題ではないとさどっているといつてもこの利益最優先の世の中には通用しないわけです。我々はそういう濁世に生きています。つまりこの世は名利追求社会です。その中でどうしたら名利追求以上の世界を内心に明確にして生きられるかが我々の究極の課題ではないでしょうか。それは時代を超えた根本的な課題だと私は思っております。予定の時間がきましたので本日はこれで終わらせていただきます。

以上

あとがき

本書は平成十八年十月二十二日、第十六回報恩講における櫟暁先生のご法話の記録です。

宗祖親鸞聖人が浄土の真宗を顕かにされ、その後、蓮如上人のご教化から一挙に真宗教団は隆盛し今日に到っています。仏教教団としては、特に東西両本願寺は日本最大の教団組織になっています。しかしながら、教団が大きいのと信仰の充実は同義ではありません。「他力の信心」を会得し、信心の人によって今日、本願念仏の教えが伝えられ届けられています。

本書で櫟先生がとり上げてあります、「我は実に此の念によりて、現に救済されつつあるを感ず」という清沢先生の感得のような味わいをもっているかどうか、そういう問いかえしをもって生きることがとても大切だと私は思います。最近では年金や介護の問題によって不安に苛まされ、生きた心地もなく、事件や事故も引き起こすということもあります。世間の価値観に依り処をおくのではなく、仏法に依り処をもたないと、不安の真っ只中のままで、虚しさや切り切れなさで死んでいきます。お釈迦さまが提起された生・老・病・死の四苦と向き合わざるえないこの現実から目をそらさず、仏の智慧に触れて真の安らぎの中を生きるということを報恩講を通して味わっていききたいと思うことです。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様には、お役を快くお引き受け下さり感謝申し上げます。

合掌

平成十九年十月二十八日

第十七回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎